

婦人宣教師、ミセス・プラインの
「おばあちゃんの手紙」(11)

～アメリカン・ミッション・ホームの
創立者の一人～

小林 恵子

二四

横浜 一八七五年一月二十日

私の愛する小さなキティーへ

今日は何んことをあなたにお話しすると思いま
すか？ 私たちのホームにも小さなキティーがいる
のですよ。どうして同じ名前の子がここにいるかお
話ししましょうね。

初めに言っておきますが、日本人の多くは豊かで
なく子どもを育てるのにお金がかかるので子どもを
欲しがらないということです。それに、子どもが生
まれると母親は田畑にでて働くことが出来ないし、
また、他人の家に雇われている奉公人で妻のいる男
たちの多くは妻に子どもが生まれることを許さない
のです。なぜなら、これまでのように妻が働いて夫
を助けることができなくなるからです。

私たちのホームで働いている使用人の男たちも同
じ考えでしたが、私たちと一緒に暮らしているうち
にその考え方は良くないと思うようになりました。

そして、子どもは神さまからの贈物だから両親は喜ぶべきことで、子どもたちをよく世話してあげなければならぬというように子どもの誕生について使用人たちの考え方がずいぶん変わってきたのです。

さて、使用人の一人で「べっとう」と呼ばれ（馬丁、御者のこと）私たちの年取った馬の世話をしている男がいます。この人はホームに来た最初の頃はあまり良い人ではありませんでしたが今ではまったく人が変わったようになりました。そして、私は彼が神を愛し仕えることを学んで欲しいと願っています。先週、神様は彼の家庭に可愛い女の赤ちゃんを恵んでくださいました。そして、彼は赤ん坊を与えられたことの喜びを感じ、これ以上幸せなことはないというほど幸せなのです。なんと彼は赤ん坊のために小さな家から外へ出たがらないほどなのです。彼は赤ん坊と離れてはどこへも行きたくないと言うのです。

彼は以前には子どもを育てる時間もなければお金

もないので赤ん坊は欲しくないと言っていたのですよ。でも、今はよい家庭とよい友だちに恵まれ本当に感謝しています。そして子どもが生まれた次の日、彼は私の部屋にやって来て日本人がいつも敬意を示すときによくやるように額を床にこすりつけ、何度も何度も赤ん坊のお礼を言って私に赤ん坊の名前をつけて欲しいというのです。

私はちょっと困りましたが、とうとうメアリーやパーティーやあなたが一緒に写っている可愛い写真のはいつている額縁を彼に見せ、あなたの顔を指さしてアメリカに住んでいる小さな孫の女の子と同じ名前をつけるのはいかがかと尋ねました。彼は「キティー」という名前を言ってみて何度か行ったあとで、その発音がとても上手に言えるようになりました。

彼は大変喜んで「ありがとう、奥さん」「おおきにありがとう」と日本語で何度も言い続けました。これはとても感謝しているという意味なのです。

赤ん坊のキティーはとても可愛くてこれまで私が見た日本の赤ん坊のなかでは一番愛らしくて、あなたと同じように白い肌をしているのです。いつか、この赤ん坊の写真を写して送ってほしいね。きっとあなたに喜んで貰えると思いますよ。

この赤ん坊の父親はホームの女の人たち全部にどうしてキティーの名前がつけられたかを話し、その子の名前をいつも呼んでいました。そして彼は「私の家のキティーもやがて、このピアソンさん（ミセス・プラインと一緒に日本に来た婦人宣教師の一人、初代校長）の学校に入るでしょう。そして神様に守られ賢い女性に成長し、良い事を沢山するようになってほしい」と言いました。

今、私があなたにお願いしたい事はあなたと同じ名前の日本の赤ちゃんのために祈ってほしいことです。神さまが私たちの祈りを聞いてくださることは知っていますね。あなたが祈ったとき、神さまは可愛い妹を与えて下さったでしょう。神さまが祈りに

答えてくださることを信じてこの小さい日本の子どものために祈って下さい。今、これがあなたに出来ることです。でも、この子が私たちの学校に入るくらい大きくなったら多分あなたがこの子を援助するようになるでしょう。

神さまはこんなに沢山の愛らしい小さな子どもたちを私に与えて下さいました。アメリカの私自身の故郷の家だけでなく、日本でのこのホームにも。そして、子どもたちみんなが私を愛してくれているのです。この子どもたちが私のそばにやってくるのを腕の中に何人はいれるかやってみようと言っているのをあなたが見たら、きっと面白がるでしょうね。もし、主イエスがあなたたちみんなを主の牧場の小羊としてすべての危害や罪から安全に守り導いて下さっていつか私たちが天国の神の玉座のまわりに集まることができたら私はどんなに神を賛美することでしょう。

故郷の皆さんたちに心からキスを送ります

おばあちゃん

*

二六

横浜 一八七五年六月二十日

愛するメアリー、パーティー、キティーへ

…まえがき、略…

さて、今日は私たちが山の方(箱根)へ旅したときのこととそこで私が経験したちょっと怖い出来ごとをお話ししましょうね。

山道に行くには「かご(駕籠)」という乗り物に乗って行くということは前の手紙でも書きましたね。そして、「かご」は日本人のように足を折って座ることに馴れていない私たちにはどんなに辛いものかという事も書いてしょう？ それで、私はこの「かご」に手を加え、もっと楽な乗り物にしようと考えたのです。それで大工さん呼んで普通より

ずっと大きな「かご」を私のために作らせたのでこれまでの「かご」とはかなり違ったものになり、乗り心地のよいものになりました。でも、日本の人々がどんなに昔からのやり方を堅く守り続けてきたかという事は知りませんでした。もし、それを知っていたらこうした改造はしなかったでしょうに。

ある日、私たちは十マイルほど離れた箱根の山の方に滞在している何人かの友だちに会うため、グループをつくりました。そこは素晴らしく景色のよいところですが険しい山なのです。仲間の一人の男性が私の「かご」を見て「大きな東号」と名づけました。私は他の人々が小さな「かご」に窮屈そうに座っているのを見て、私の「かご」はとても乗り心地がよいと言って鼻たかだかでした。私は他の人たちにも時々私の「かご」に乗せてあげましたが、ちょっと利己主義かなと思いました。

途中、私たちは沢山の硫黄の温泉が噴きでている小さな村を通りました。大きな温泉宿も何軒もあり

ました。これらの山を登っていく途中には温泉場が沢山あってこのお湯で病気を治療しようと日本各地から人々が来ているのです。そこには多くの身体の不自由な人々や病気の人々がいて、その光景は何とも悲惨でした。おそらく、この国のように身体じゅうおできや湿疹などの傷をもつ人の多い国は世界じゅうどこにもないのではないかと思います。これもみな人々の悪い生活習慣によるのではないかと考えます。…略…

私たちが山道をそれほど行かないうちに雨が降りだしました。そして、温泉宿のある「芦ノ湯」に着いた頃はどしゃぶりでした。また風がとてもひどかったので私たちをかっいできたかごかき人夫たちは足をすくわれ歩くのも大変でした。山道は非常に狭く、やっと歩けるほどの小道だったので大雨が降るとそれらの道はたいがい水路か溝のようになって水が勢いよく流れるのでかごかき人夫にとっては大変なことだったのです。その上、気の毒にも雨で足

もとが見えなくなり、どこをどう歩いているのか首めっぽうに行くよりしかたがなく深い水のなかに足をつつこんで時々とがった石をふんでしまうこともありました。この人たちは靴をはいていないのでどんなに大変だったかあなたたちにも想像できるでしょう。

私たちが友だちの滞在している「木賀（キガ）」温泉の近くに来たとき、有難いことに雨が少しの間やみました。雨よけのため「かご」に大きな油紙をかけていたのでこれまで景色が見れなかったのですが、油紙を取り除いたとき、私たちは驚くほど雄大な美しい山の景色に驚きました。

私たちが通って来た山道は「木賀」温泉のすぐ近くまで山頂をとり巻くようにぐるぐると渦巻き状に続いているのですが、ある場所で突然、視界が開け五百か六百フィートくらい下の谷間に小さな美しい村がひろがっているのを眺めることができました。木々の緑の間に見える隠れする小さな蘆葺の家、しゃ

れた縁側のある茶屋、このどしゃぶりの雨で水かさの増した無数の噴流が岩々の間を荒々しく雄大に流れ落ちるさまなど、本当に美しく、生涯忘れられない思い出になりました。このすばらしい景色を見た事と友だちが大変歓迎してくれた事で、あの「芦ノ湯」で私の心を悲しみで一杯にした人々の悲惨な光景からどうやら開放される事ができました。

友だちが用意してくれた西洋式のなつかしい夕食をご馳走になったあと、私たちは帰ることになりました。ところが、この帰り道に「大きな東号」のかがに乗った私に大変な災難がふりかかってきたのです。

雨は又どしゃぶりになってきました。こういう雨はこうした山々に特有のものらしいのです。そこで私たちは再び油紙ですっかり覆われ、ぬれねずみになるのをさげなければなりませんでした（日本で作られているこの油紙は大きくて柔らかく、こうした水よけなどのためにとても重宝されているもので



す。これまで私の「大きな東号」を担いでいたかがき人夫たちは何事もなくきましたが、この後、この人たちは全く違った面を私にみせはじめたのです。私たちが出発して間もなく、私のかがかき人夫たちは言いだしました。「奥さん、チップをはずんでくれませんかね、この「かご」はえらく重いのですよ」。「あっしや足がびっこになっちまって、もうこれ以上歩けませんや」それからは少し行っっては「かご」を地面におろし、また少し行っっては「か

「ご」をおろし、「かご」のたれ幕を上にあげて私にチップをくれとしきりに要求するのです。

私はこの人たちにお金をあげるのはどうかと思いましたが。というのは、これらのかごかき人夫たちと交渉してくれたブラウン博士八註ⅠⅣからお金は渡さないようにと言われていたからです。それで私は財布を持っているのをこの人たちに見せないようにしていたのです。やがて、私は自分の「かご」が皆の一行からずつと遅れてしまっていることに気がつきました。私はだんだん不安になってきました。

そこで私は他に何かよい方法はないかと考えました。最初に私はクラッカーの包みを彼らに分け与え、それから「向こうへ着いたら、チップをあげましょう」と言いました。でも、人夫たちは要求する事を止めないばかりか早く歩こうともしないのです。正直に白状すると、私はだんだん恐ろしくなってきたのです。前方を行く他の「かご」かき人夫たちのかけ声も聞こえないし、今はもう皆の「かご」

がはるか遠くに行ってしまったって見えなくなっているのです。あたりは、すっかり暗くなり雨は相変わらず激しく降っています。私の心臓の鼓動がいつもより早く打ち、何か大変なことがこれから起こるのじゃないかとふるえていたのも無理ないでしょう？

でも、これまで私は日本人についていくらか学んできたのです。ですから、この人たちは大変貧しいからこんな事をするので、何か特に彼らを怒らすようなことをしなければ実際に危害を加えるような人たちがいないということを知っていました。そこで私はつとめて平静をよそおい、父なる神にこんな状態のときにはどうしたらよいか助けて下さいと祈ったのです。

人夫たちはしつこくせがみ続けました。そこで、ついに私は木質温泉で買ってきた桃の箱を開け、彼らに分け与えました。木質は日本で最もおいしい桃の産地なのです。暗くて何も見えなかったのですが、この人たちが私のあげたおいしい桃を食べるの

を見て——いいえ、桃を食べる音を聞いてですが——私はその桃が留守番をしているホームのみんなへの土産だっただけに心が痛みました。

今まで私がやった事は全部ダメだということが判ったので私はついに彼らにお金をあげるしかないかと決意した丁度その時、たいまつが見え、他の人夫たちの呼ぶ声が聞こえたのです。他の人々はみんな箱根に着いて、私に来ていないのに気がついたのです。そこで、人夫たちに竹でこしらえた幾つかの大きなたいまつを持たせ、私をむかえによこしてくれたのです。

私がどんなに喜んだか、あなたたちにも想像できるでしょう。小さな山小屋にやっと到着して、私たち全員が集まって夕べの祈りをささげた時、私は今日一日の楽しかったこと、嵐と暗やみの山のなかで「大きな東号」のかごに乗って孤独で怖い思いをしたこと、そこで神の愛によって守られたことを天の父なる神に感謝したのでした。

愛を込めて おばあちゃん

初めの手紙は故郷にいる孫のキティーにどうして同じ名前のキティーという女の赤ちゃんがこのホームにいるかといういきさつを知らせたものである。そして、是非この赤ん坊のために祈ってほしい、学校に行くようになったらこの子を援助してほしいとも書いている。

ところで、ホームの宣教師たちは子どもや少女たちを教育しただけでなく、ここで働く奉公人たちにも大きな感化を与えたことは『横浜共立学園一二〇年の歩み』の書に「特筆すべきことはホームの使用人全員がクリスマスチャンになったことである」と記されている。△註2▽ホームでは日本人のための祈禱会が開かれていたが、宣教師たちの信仰者としての日々の生活がなにより彼らに感化を与えたものと思われる。手紙のなかでは馬の御者をしていた奉公人の男の家庭に女の子が生まれ、彼がだんだん変わっていく様子が面白く読みとれる。子どもは

親の所有物のように考えていた当時であって、子どもは神からの贈物で両親は子どもを大切によく世話してあげなければならぬというキリスト教に根ざした考え方―フレールベルの教育精神と通じる―に変わっていったことは子どもに対する親の姿勢を根本から変革するものであった。

残念な事にこの赤ちゃんはまもなく病死し、ホームで葬式が行われ百人もの大人や子どもたちが出席したことが後の手紙(二七)で書かれている。そしてミセス・ブラインは悲しみとともに赤ん坊のキティーの死によってホームのみんなが天国でのよりよき生活について学ぶ機会を与えられた事をその手紙で記している。

次の手紙は箱根に旅したときの体験を書いたもので読み手もドキドキするようなスリルのあるお話である。言葉もわからぬ異国の地にあつて嵐と暗やみのなかでチップを要求されるのはどんなに恐ろしかったことであろう。「かご」を工夫して改造したというミセス・ブラインは進取の気性と勇気のある女性であつたと思われる。

昔から「箱根の山は天下の険」と歌われたが明治の初めに「かご」で登つた箱根温泉の様子など、険しく美しい山々の姿とともに昔の温泉場をかいまみる思いがする。一緒に同行した人々は横浜に住む宣教師たちや家族であつたと思われる。手紙のなかにでてくるブ라운博士は横浜二二番地のホーム(現・横浜共立学園)の隣地に住む宣教師であつた。

(国立音楽大学)

△註1▽ブ라운博士 (一八二〇―一八八〇年)

Brown, Samuel Robbins 一八一〇年、米国コネティカット州生まれ。安政六年宣教師として来日、ヘボンと協力して日本語研究、伝道、聖書翻訳に従事。横浜二二番の自宅にブ라운塾を開き伝道者の養成にあたる。

△註2▽『横浜共立学園二二〇年の歩み』横浜共立学園 五

四頁 一九九一年発行